

連帯の挨拶

(救援連絡センター世話人—丸山照雄)

72年・早春の想い

——困難な状況下における2・3の感想について——

春の嵐と申しましょうか、昨夜は大変強い風が吹き、雨が雨戸に打ちつけられ、家もゆるぐほごでありました。この春の嵐にもたえられるような困難な嵐のなかにたたきまわされている感じをいただくのは、私一人ではなく、お集りの皆様と共通のものと思います。

このような時、私のような生れの者は、どうしても自己の拠って立つところの原点に還り、そこから話をすすめたいという心地がしてまいります。

こういう集会では耳なれない話できざに聞かせるかもしれませんし、遠くつでそんな話にはつきあっておれん、と思われる方もあるかと思いますが、まあ坊主を壇の上にあげてしまったんでしょうがないと、あきらめてお聞きいただきたいと思うのです。

自分の拠って立つ原点などと大袈裟にいつてみしても、哲學的原理などというものではありません。私など臆病者ですから、日蓮という方のお力をお借りして、こういう時になにかを申しあげ

32

蓮は、1271年50歳の時佐渡へ流罪となったのですが、その佐渡の現実、首こそ切られませんが、とても生き長らへる生活状態ではなかった。その極限に立って、『天もすて給へ、諸難にもあえ、身命を期とせん』と決意した。神仏の仰護もあるかというなみの信仰者の立場ではなく、神仏かろをも見棄てられたという極限に立って、本当の宗教的使命感、宗教的境涯というものを思いだしている。絶対絶命の地点、仏の救いの手も絶たれたという自覚のなかで、なにかつ仏陀釈尊の教えを信じた仏教の真理のために命をすてて生きよ—身命を期とせん—という信仰の決意を表明したのであります。

オ二点、転向の問題をいっている。婆羅門教徒から、生身の两眼をよこせという責めに堪えられず、返転—転向した舍利弟のことをいっている。また、悪知識—真理を見あやまらせる知友によって転向していくことを指適している。そして、善回悪などという世俗の道徳的判斷に左右されて、根源の真理をすてるようなことがあってはならない—そうしたことが結局はこの国土・社会とそこに身を置くわが身自身を生きながら地獄へおとし入れることになるのだ。善惡を超えて真理に生きる立場に立って—と言っているわけです。

オ三点、日蓮自らの体験に即して、甘言—

33

というところであり、したがって、その日蓮聖人が書き遺しておられます言葉にたちもどったところから考えてみたいということでもあります。

今から特選しようと思っております一節は、鎌倉で斬首の危機をかろうじて逃れた日蓮聖人が、そのまま佐渡へ流罪になり、餓死と凍死の命運を眼前にして著した『南無抄』の一部分です。

『詮ずるところはすて給へ、諸難にもあえ、身命を期とせん。身命が六十却の菩薩の行を退せし、乞取の婆羅門の責任を堪へざるゆへ。久遠大通の者の三五の塵をふる、悪知識に備ゆへなり。善に付け馬につけ法華経をする。地獄の業なるべし。本願を立つ。日本國の位をゆるむ、法華経をすてて観経等について後生をこせよ。父母の類を制、念仏申さずわ。なんどの種々の大難出来すとも、智者に我義やぶられずば用ひじとなり。其外の大難、風の前の塵なるべし。我れ日本の柱とならむ、我れ日本の眼目とならむ、我れ日本の大船とならむ、等とちかひし願、やがるべからず。』

短い文節ですが、ここにはいろいろな重大な問題が圧縮されて入っております。今その全部について申しあげるわけにはいきません。今の問題と関連する二・三のことを申しあげようと思っております。

まずオ一、真から申しあげます。宗教家であった日

33

名善や地位や財産をあたえるかろ真実の仏教をすてるといわれた。題目を唱えることをやめて念仏を言わんと父母の首を刎ねるとおごされもした。しかし、このような笑難もたいしたところではない。次が大切なところなんです。

智者に我義が破られなければ、それに従うわけにはいかない。その外の大難風の前の塵なるべし。我れ日本の柱とならん—とつづくわけであります。

住んでいる家は焼き打ちされる。旅をすれば武士団に襲われて弟子は殺され、自分を傷つく。あげくのはこに斬首の座にすえられる。父母の首を刎ねると煽喝をうける。そんな大難は風の前の塵だといっている。そんなことには屈しない。しかし、わが義—大切なのは自分の求め主張してきた真理・正義というものが、それが破られるようなことがあったら、それは本当の大難であらう—といっている。

大切な時向を費してこのようなことを申しあげてまいりましたのは、二つの問題があるからであります。

ひとつは、転向の問題であります。これはすでに人間が真実や真理を求めてやまないという精神的な働きを始めた当初からあった問題であったし、今日でもまた同じような形で問題は継続されている。その根本の問題は、物理的な力で真理の

34

主張をやめるか、どうかということではなく、主張してやまない『真理』そのものがどうであるか、ということの方にあるわけでありませぬ。

もうひとつは、日蓮が「わが義」といっておりますのは、今日の言葉に単純に翻訳することはできませんが、「真理と正義」といいかえることもできるでありませぬ。お東りの皆様方の問題を通していうならば、イデオロギーの問題であり、あるいは「政治理論」の問題でもあるでしょう。

ことを日蓮にまひさかのぼるしめて問題をたてるまでできないことかもしれません、今日われわれが直面している問題というのは、新しい問題のようでいて実は古い問題でもあるわけです。危機に臨んでは「原則」へ遡って問題を整理することが大切であります、その「原則」というものは、近代の百年や二百年などという昨日今日のことであると考えるのは早計であって、ある意味では少くとも七百年も昔に確認をされ、実践をされている「原則」もあるわけです。日蓮の立場からみれば、「何だまだそんなことおろおろ、うろろうしているのか」ということになるかもしれない。

今日の弾圧状況については他の講師の方からお話があると思しますので、あらためて申し上げることできないんです、今日の問題と立ちむかっていくうえでの私なりの読解を少し申し上げなければ

36

え、問題を明らかにしたか、たかろです。

武装した武士用とその権力に対して拳銃で立ちむかった日蓮は生命の危機に常におびやかされつづけていた。そうした中で、「転向」という問題は生涯の問題としてあったと思うんです。

真理とか正義とかいうものは、命がけでしか守れないし、主張できないものであるということでは、昔も今も少しも変わってはいない。市民社会という偽制・虚像のなかで、なんともなく無事安泰に、口先だけでやっていけると考えているとしたら、それは大間違いでしょう。今日の資本主義体制、帝国主義権力というものは、やはり心死で打解の道を求め生きのびようとしている。追いつめられ、あらゆるところで自己矛盾・破綻の様相を露呈しながら生きのびる道を探している。そういう権力の地獄に壁打ちあがき、荒れ狂う状態を見ながら、そののたうちまわるとうち驚いて先どり転向をはじめようでは最初から肉いにならない。——あえていうならば七百年昔の乞食坊にもわらわれるような存在じゃないか。そういう人は、革命とかマルクス主義なんていることは私みたく口にすべきじゃないわけです。

日蓮は弾圧や甘言による転向のすすむはたいしたことはないといっている。親の首を斬るこいて相喝されても動じない、「風の前の塵」吹けばとぶようなものだといっている。しかし、智者にわ

38

ばなるないと思ふんです。

昨日「4・28弾防法裁判」のオ17回公判が開かれたのですが、非釈明の最初の段階で検事側は全く論理破綻を起してあります。論理の破綻などということは問題にせせず、国家権力は反政府・反体制勢力の存続を企ててくるであろうことは、明白であります。警察権力の方は：破産的なデッチャゲを徹底的にやってくる。松川事件は戦後の政治謀略デッチャゲの典型とされていますが、今日では松川事件は毎日起つておる。朝鮮自征隊事件、公舎爆破事件、そして今回の「連合赤軍事件」すべてがデッチャゲの材料にされ、活用されていくでしょう。国民大衆への相喝という意味でこれらは有効にはたさきはじめてあります。先ほどから申し上げてきましたことは、相喝の効果として現われている「転向の先どり」現象があるからであります。弾圧と相う救済運動においてさえ、その速やかなるざるをえない状態があるわけです。

日蓮などという方をひっぱりだして、私がくどくどと申し上げたのは、今日近代的救済を身につけた知識人というものを、宗教のことなどといえは蔑視の対象でしかないと思つておるような知識人の中に、権力の簡単な相喝におびえて「先どり転向」をはじめていることを知ったからであります。そのような人たちに対して、七百年昔の一介の乞食坊主の生きざまを対置して、問題を明らかにし

37

が義破られれば——これは屈せざるをえない。敗けであるといっている。

私など坊主の側からみると、革命党の「戦略」というものは、これは日蓮のいう「わが義」にあたるわけではないだろうか。この「義」をすててしまったり、これを軽視するごどういうことになるか、「連合赤軍」といわれている原因について私はその根本のところまでよくがいかない。

オーに政治の理論というものは、科学的現実認識を基礎として、変革の主体の思想性を向いつつ、イデオロギーとして形成されるものだろうと私には思える。最近の傾向は基礎となるべき科学的認識がどうも弱い。軽視されている。オ2に変革の運動を自己相対化する作業が欠けている。いかなれば思想の自己点検において観念論になっている。運動の主体の自己相対化がなされないと、変革の運動は現実とがみあわない。盲目的独走になってしまう。自分が今何をしているのか認識しえない行動になってしまう。

今日までの状態はやむをえなかつたかもしれないが、今からは、この墳墓の前に掲げられている善い生命に誓って、その失われた若い生命を無にせしめぬために、必ず克服されねばならない課題であると思うのです。

観念論といえはかつころがいいが、政治的認識、政治理論を掘あげにした心積ラディカリズムが

39

往行しすぎたと思うのです。そういうものがすべて無駄だというのではなく、その分に応じたあり方をしなければいけない。情緒的反射運動では帝国主義体制の政治的リアリズムを打ち崩すことはできないことが、もうはっきり自覚できたと思うのです。

言っでは悪いですが、観念的・心情的ラディカリズムは私の方の——宗教の方の営業範囲じゃなかったですか。

権力の持っている政治的リアリズムに突敗した、それが適合派軍における内的矛盾であり敗北であったらと思うしまた、一方にある転向の問題も同質同根の問題であると思ふのです。

しかし、奥に革命的な政治潮流というものは、必ずや文學的、哲學的、宗教的心情左翼を乗り越えて生まれてくるだろうと私は確信しています。したがって私を安心して坊主にとどまると思っているわけでは、

最後に、帝国主義「権力の追いつめられた自己表現が、今日のファッショ的な弾圧状況であることを確認しておきたいと思ひます。今日のこのようにならば、何れも衆意を、権力はおびえている。なぜですか。「狂気集団」の主催だからなのか。超過激集団の救援会が主催しているからなのか。そんなことはありません。彼らが怖れているのは「真理と正義」をだれが相っているのか、それを知

40

っているから怖れているのです。そこへんでろろしている私服や機動隊がそう思っているかどうかは知りませんが、少くとも権力の中軸部は知っているから怖れているんです。

こういう時にわれわれは力をだして、弾圧に抗していかなければ、力をだす時はないでしょう。力とは何か。理にしたがって真理と真実と正義を大衆の前に明らかにしていくことです。弾圧という暴力によって、いかなる真実と正義をおおいかくそうとしているのか、そのことを明らかにしていかなければならない。自らの過ちをただすこと、自己批判すること、それを当然しなければなりません。と同時に、人間の、人類の、真実の解放とはどのようなものであり、いかなるプロセスで実現されていくのか、その真理を明らかにしなければならぬでしょう。

正面にいて、今日われわれは危機と困難に直面しています。需項問題を解決しなければ、弾圧のたたかきも救援活動もできないなどということをおっしゃる者もいます。権力側の思うつぼに言いたようにはまりこんでいるんです。弾圧というものは、特定の個人や、特定の集団にかけられているのではなく、理由のいかんを問わず国民にかけられているんです。軍国侵略体制の強化のために、反政府、反権力、反体制のすべての運動、思想、言論、意志に対して、その壊滅をねらっ

41

弾圧であることは明々白々じゃないですか。

このことを明らかにして、大衆的な抵抗戦線の構築を急がねばなりません。それが、一介の坊主である私の任務であると心得ております。どうか皆様方のお力ごえをいただきたいと思ひます。

この講演を「風潮」の犠牲となられた若き「兵士」らの霊前に捧げ、回向の一助といたします。

南無妙法蓮華經

合掌

1972年3月31日

- ① 同志殺しの内因をえぐり出し、自己批判を
とことん貫徹せよ!
- ② 銃撃戦支持の名の下に同志殺しをパイ
リヤ化する公害企業的態度を批判せよ!
- ③ 革命の暗黒を吹き飛ばし反動の嵐に勝
ち抜ける赤々とした火を燃やせよ!
- ④ 階級闘争はするが究極は無の銃撃戦
ではなく、プロレタリア独裁をやる銃撃戦
のための地下武装労働党を建設せよ!
- ⑤ 佐藤政府打倒!

共産主義者同盟赤軍派 上野 勝彌
世界 赤軍 兵士

④同志殺しの反革命的意味と公害企業的態度

赤軍とは、プロレタリア権力、プロレタリア独裁の支柱たるべきものである。ところで連合赤軍の同志殺しは、あんな事をやる連中に将来権力の支柱などいかにたうどんな事をされるかわかん。あんなやつにまかせるわけにはいかない。」と広範なプロレタリア

42